

学科 こどもの生活学科	所感				
氏名 伊藤 久美子	着任一年目として学生を理解するため、できるだけ一人一人に寄り添った指導を心がけた。保育という尊い営みに携わる人財は、「自分が大切にされた」という経験によって「人を大切にする」という心を持つことが不可欠だと考える。すべての人が自己肯定感をもって学びに向かうことができるようにサポートをしたいと思う。				
家政学部の教育目標は、本学の教育目標と教育方針の下、「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神の実践を通して社会的に自立して生きていく上で必要な①スキル・リテラシー・教養等に関する一般的知識・技能と②家政に関する専門的知識・技能と③建学の精神・社会人基礎力・pisa型学力を統合的に身に付け、社会に出てからは、これらの知識・技能をベースに生涯学習社会の中で自己の潜在能力をさらに開発しながら、職場と地域の課題解決に貢献できる人材を育成することである。					
イ ライフスタイル学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、これからの社会の新しいライフスタイルのデザインを提案することによって、人々の日常生活を衣・食・住の面から支援することのできる人材を育成することである。					
ロ 管理栄養学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、管理栄養士の資格を生かして、チーム医療、健康増進・疾病予防、食育・栄養指導又は健康をテーマにした食品の研究・開発等で活躍することによって、人々の日常生活を健康の面から支援することのできる人材を育成することである。					
ハ こどもの生活学科の教育目標は、家政学部の教育目標の下、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格を生かして、子どもたちの学力および社会性・社会力の基礎・基本を育てることによって、人々の日常生活を子育ての面から支援することのできる人材を育成することである。					
1 教育の責任					
私は、「幼稚園教諭免許状」「保育士資格」に関わる教育福祉系の科目と実習関連の科目を担当している。幼稚園教諭として幼児教育の現場で子どもと関わった経験を生かし、保育の素晴らしさや楽しさはもちろんのこと、子どもを優しく受け止める愛情やゆとりを持った心、子どもと共に遊びを楽しむことができる明るい心、保護者の気持ちを理解して支援する力など、保育現場で必要とされる保育者を育てることに努めている。保育という尊い営みに携わる教員・保育士として、学生一人ひとりが子どものかけがえのない存在を理解し、その権利を尊重できる保育者となるよう導くことに深い責任を感じている。					
2 教育の理念と目的					
保育者にも個性があり、子どもと同じように学生にも得意不得意の個性があって当然である。しかし、学生によっては、向上心や社会の要求に応える態度を備えていても、その魅力を十分に発揮できない学生がいる。社会が求める能力と学生自身が持つ魅力や能力が相応するような教育を行うには、自分の長所を自分で認めることができるように学生の魅力を具体的に言葉にして伝えることだと考える。また、学生の成長を可視化することでさらなる成長の指標とすることができる。逆に、短所となる部分は丁寧に伝え、改善策を自ら熟考して向上できるよう事例を挙げながらアドバイスすることを心がけている。自己肯定感を持って自分の考えを表現したり、何かに挑戦したりして、多様な子どもの姿を想像しながら保育を思案できる力を身につけてほしい。	科目名	学科	開講期	受講	備考
	こどもと環境	こどもの生活	3年前期	42	専門科目
	保育内容(表現A)	こどもの生活	2年前期	49	専門科目
	保育実践演習	こどもの生活	4年前期	48	専門科目
	保育実習指導Ⅰ	こどもの生活	2年後期	50	専門科目
	保育実習指導Ⅱ	こどもの生活	3年後期	42	専門科目
	保育者論	こどもの生活	1年後期	36	専門科目
	保育内容(環境)	こどもの生活	2年後期	46	専門科目
	教職保育特論3	こどもの生活	3年前期	6	専門科目 オムニバス
	保育実習Ⅰ	こどもの生活	2年後期	44	専門科目
	保育実習Ⅱ	こどもの生活	3年後期	36	専門科目
	他5科目	こどもの生活			
3 教育方法					
保育内容に関する科目(保育内容「環境」、保育内容「表現A」、こどもと環境)は、アクティブラーニングを取り入れた能動的な学びができる環境を整え、理論と実践が結びつくように構成している。保育内容「表現A」は、様々					

な表現活動を体験して総合的な保育の表現を理解するため、コミュニケーションを重視したグループ活動を通して、自分の意見や考えをメンバーに伝える表現を体現できるよう工夫している。また、保育内容「環境」、こどもと環境の授業では、エプロンシアターや手作りおもちゃなどの作成を通して、より実践的な保育技術を習得できるようにしている。実習関連の科目においては、理論と実践をバランスよく組み込み、保育者の役割をイメージしながら子どもとの関わり方や保育の実技力の向上を目指し、成長できた点と今後の課題を明確にして、次の実習に活かすことができるように省察する。

4 授業改善の活動

授業改善のため、学生からの授業評価アンケートを真摯に分析しながら、次期授業での具体的な改善策を実行している。授業評価アンケートの結果は、「保育内容（表現 A）」の授業では、「質問 2 教員の説明は、明確で理解しやすかった。」に対して、平均値が 4.26 であった。また、「5 強く思う」と回答した学生の割合は 50.0%であった。自由記述の例としては、「講義が長すぎて最後のサンドアートの時間が取れなく満足した作品を作れなかったため、もっとサンドアートの時間を儲けてほしい」という意見があった。この意見を踏まえ、授業時間配分を見直し、サンドアートの時間を確保するなど、講義内容をより凝縮したり、一部を事前学習とするなどの工夫をしていきたい。また、別の自由記述として、「様々な表現遊びとても楽しかったです。サンドアートもいい経験になりました。また、どこかでやれたらいいなと思います。」という肯定的な意見もあった。この意見は、表現活動が学生にとって有意義であることを示唆しており、今後も積極的に取り入れていきたい。

また、保育実習指導Ⅰ・保育実習指導Ⅱの、実習に関連する科目においても、実技発表や模擬授業のための作業時間を設けることで、学生が十分に自らの力を発揮できるようにしていきたい。

5 学生の授業評価

学生の評価は、シラバスに記載している通り、学期末試験と平常評価（レポート、小テスト、成果発表※プレゼンテーション・作品制作、学修態度※主体性、実行力、課題発見力など社会人基礎力を含む）を組み合わせで行っている。学生の授業評価アンケートの結果から、多くの科目で「教員の授業時間分の学修内容実施、明確で理解しやすい説明、質問や相談への配慮、シラバスとの一致、成績評価基準の明確さ」に対して高い評価を得ている。これらの結果は、学生が授業内容を理解しやすく、安心して学べる環境が提供できていることを示唆していると考えられる。

6 学生の学修成果

授業では、具体例の提示、実践的な活動の導入、課題提示の工夫、丁寧な個別指導などを通して、学生の知識や理解が深まるように工夫し、保育の実践力の向上と主体的な学びによって学修成果の向上を目指している。特に、保育教材の作成において、指導案立案による保育現場での活用方法を思索することで、実習に向けた事前準備ができ、実習に臨む意欲を引き出すことができる。しかし、学生の授業評価アンケートでは、「必要性はあったが発揮できなかった」能力として、「計画力」「創造力」「発信力」があげられる。保育の指導案作成の課題や保育実践を踏まえた実技発表の活動を引き続き取り入れて、学生の実践力の定着に繋げたい。そして、模擬授業など保育教材を使った発表の経験によって、実習を通して学びがどのように保育士としての専門性に繋がるのかを具体的に示すことで、学生の学びの深化とモチベーション向上を目指したい。

7 授業科目に関連した教材開発

保育者の資質能力として不可欠なコミュニケーション能力や表現力を向上させることを目指して、「サンドアートシアター」を取り入れた授業を実践している。学生の感性を育み、子ども理解を深めるための教材として開発し、保育内容（表現 A）の授業に取り入れている。また、保育教材作成において学生がイメージしやすいよう、多数の見本を作成し、学生が実物に触れることで具体的な教材の構成や工夫を視覚的に理解することができる。様々な教材を比較してみることは、子どもの発達段階や興味に応じた適切な教材を選ぶ力を身につけることができると考えている。

8 指導力向上のための取り組み

授業評価アンケートの結果を詳細に分析し、リフレクションペーパーを作成して授業改善に積極的に活用している。また、FD 研修会や学会、他大学の先生との研究会に参加して自己研鑽に励んでいる。自身の研究では、幼稚園を研究フィールドとし、子どもたちの遊びの環境や保育者の子ども理解について調査し、保育者の指導力や幼児教育の質の向上に寄与するための方法を検討している。研究会では、保育現場の保育者たちと共に、保育者を目指す学生の効果的な保育実習指導の在り方について研究している。これらの教育・研究活動で得た知識を学生指導に活かしていきたい。

9 今後の目標

私の今後の目標は、学生が主体的に学びに向かうことができる授業環境をさらに展開させていくことである。保育現場の具体的な事例を積極的に取り入れ、理論と実践を結びつける授業展開を強化するため、指導案立案や保育教材の作成を通して学生の保育実践力を鍛えたいと考える。学生が自己肯定感をもって何事にもポジティブに取り組めるよう、より一層学生一人一人と丁寧に向き合い、適切なアドバイスや指導をしたい。そのためには、授業アンケートの結果を真摯に受け止め、日々授業改善を行っていききたいと思う。

保育者不足が叫ばれる昨今ではあるが、保育の仕事の魅力ややりがいを伝え、愛情をもって子どもたちに接することができる保育者を育成したい。

10 添付資料

・ディプロマポリシーとカリキュラムポリシー

https://www.gakusen.ac.jp/u/univ/koukai/diplo_policy_kasei.pdf

https://www.gakusen.ac.jp/u/department/children/curri_kosei.pdf

・家政学部 シラバス

<https://www.gakusen.ac.jp/u/department/children/curriculum.html#tabs-2>